

あの頃・あの方・この言葉

～ 日本デザイン黎明期における先駆者の声 ～

vol.4 芦原 義信 氏

日本万国博開催にさいして

(1965年10月 大阪デザインハウスニュース no.3 より)



芦原 義信 氏 (1918-2003) = 建築家

1956年芦原建築設計研究所を設立。銀座ソニービル、東京芸術劇場などの作品で知られ、1968年モントリオール万国博覧会日本館で芸術選奨文部大臣賞を受賞。

1979年著書「街並みの美学」でいち早く都市景観の重要性を述べる。元東京大学名誉教授。

写真引用：芦原建築設計研究所より

日本万国博開催にさいして

1970年には大阪で万国博覧会が開催されることになった。1851年ロンドンにおける博覧会にて水晶宮が建てられて以来120年、その間、1889年のパリの博覧会にはかのエッフェル塔が建てられ、博覧会は常にその時代の文化と技術の最高水準を示すものとして高く評価されてきたが、それがいよいよ日本で開催されるというのは、われわれ日本人にとってまことに意義の深いことであると考えられる。

2年後には、すでにご承知のとおり、モントリオールで「EXPO'67」が開催されることになっているが、たまたまその事務局をたずねる機会にめぐまれ、準備の周到さや複雑さに一驚した。

オリンピックの場合は、簡単にいって、主催国は遠来の客を迎えるべく、ひたすら自国の費用で施設の整備に万端の努力を積み重ねればよい。それにひきかえ、万博の場合、主催国は自国の施設の整備は勿論であるが、国情や商習慣のことなる外国に対して、参加意欲をあおり、立派な各国館の建設に踏み切らせねばならない。

各国家間の競争意識を適当に利用する外交手腕や、確立した原則を守りとおす確固とした信念と、その反面、国際的に通用するユーモア感覚を身につけた融通性等をもった推進本部がなければ、とても世界を相手に開催の盛り上がりをもたらすことは困難であろう。国際情勢や主催国の国威や魅力によってその成否に影響があることは勿論考えられるが、主催国の手腕と熱意によってさらにその成否に影響があると云わねばならない。

次に、モントリオールの場合、各国の参加の方法に2通りあることがわかった。1つは記憶にちがいをなければチェコなどのように、最高責任者であるコミッショナー・ジェネラルを最初に任命して、その人の責任において人事をとりきめ参加計画や施設計画を実施する上から下へ決まっていく方法。他の1つは、計画が事務ベースでねられ段々上にあがってきて、最後にコミッショナー・ジェネラルが任命されてその上にのっかるという下から上へ決まっていく方法。

前者は、いわば師団長の命令一呵、機動性があり、統一した展示イメージにむかって邁進できるという特徴がある一方、まかりまちがえば方向性をあやまるおそれもある、いわゆる責任集中体制ともいえよう。

後者は、ある決められた枠の中で可もなく不可もなく中道を安全にすすむ、いわゆる責任分散体制ともいえよう。さらに、敷衍すれば、前者は芸術や軍隊の分野に共通する原理である。すなわち、市川崑は自分の信念においてオリンピック映画をつくる、国家は市川崑を選ぶところに責任があるが、そのあとは市川崑自身の責任集中体制である。文学や絵画や音楽はすべて作者の名をつけることによって成立する責任集中体制であり、陸軍の師団長や海軍の指令長官においても同様であろう。

ところが前者のような責任集中体制は自由諸国家にも案外実例が多いことがわかった。近々、竣工するトロントの市庁舎は国際懸賞設計で世界の注目を浴びたが、最初に、いわゆるテクニカル・アドバイザーが任命され、その人の責任において計画がねられ自分のよいと思う審査員が選ばれた。2枚の巨大なわん曲した板状の摩天楼は当選したフィンランドの建築家のイメージでもあるが、さらに最初に計画をねる、審査員を選んだテクニカル・アドバイザーの責任である。

わが国の国立劇場その他の懸賞設計は先に事務局で案がねられ、任命した責任者が不明のまま審査員が選ばれる場合が多いようである。審査員は応募作品を審査すればよいので、どんなイメージの建築を建てようという責任のない責任分散体制である。

またアメリカの大学では、私の知っている建築学部だけについていえば、学部長が新しく任命されると、大学の教授、助教授は辞任して、自分の思うような教育をしてくれる新任者を集めて、新しい学部を組織する。そして教育の成否の責はすべてその学部長がとるのである。

貿易も自由化し、真に国際競争が強くなると、一見、民主的にみえる責任分散体制ではものをつくりだすという仕事はやっていけない時が来ているのではないだろうか。部下のつくった計画に次々と判子を押しするような判子行政ではとてもソニーやホンダの製品をつくることはできなかつたろう。

ニューヨークのフェアでは、責任集中体制でなければできなかったであろうアメリカ産業館の迫力と、展示と建築に責任分散体制をとったアジア諸国の淋しさとの格差をつくづく感じさせられた。

博覧会はいうならば、巨大な創造物であって、人事異動のはげしい責任分散体制の行政機関等ではつくりにくいものであり、また、各国の強い圧力等で計画が支離滅裂になるおそれのあるものである。オリンピックは東知事の執念によって成功したといわれるが、さらに難しい万国博では強い責任体制の望まれるゆえんである。

